

ナチス支持の原因についての一考察 ——Abel-Documentsを用いて——

赤 松 廉 史

はじめに

ドイツおよび世界に多大な傷跡を残したナチスについて、これまできわめて多くの研究がなされてきた。ナチスによってもたらされた言語に絶するほどの惨禍、奪われた人命、世界に決して消えない傷を残したことから、数多の研究が、この問題に取り組んできた。そしてその重要性・意義は、今後も失われたいと考える。このような中、今日なお忘れてはならないのが、このナチスに対して当時、きわめて多くの人々が支持をしたことである。ナチスは、1930年9月選挙において、一躍第二党に、そして1932年7月選挙においてさらに躍進、その最大の投票数（約1400万票 有効投票の37.3%）を獲得し、国会内における最大勢力となり、政権獲得の直接的な要因となるにいたった。ナチスがこのような大衆的な支持、選挙上の成功を収めなかったのならば、その後の政権掌握はありえず、このナチスの選挙上の成功はきわめて大きな研究史上の意味を持つものであった。

このナチスの躍進に関し、当然多くの研究者が、その解明の試みを行なっていった。そこで研究の中心の一つになったのが、ナチスの社会的基盤はだれであったのか、一体だれがこのようなナチスの主要な社会的支持層であったのかという問いであった。対して中間層テーゼという捉え方が、この問への答えを提供してきた。ナチ党支持は、「中間派の過激主義の現われ」、「下級中間層の心理的反動」とする、中間層の役割が強調され、ナチ党支持者に関しては、農民・手工業者・商店主・ホワイ

カラー（職員）・官吏などの中間層の果たした役割が強調されてきたのである。

しかしその後、ナチズムの支持基盤として中間層を突出させる中間層テーゼは批判・修正されるにいたっている。特にそれまでナチスに対して抵抗的であったとされた労働者層においても、ナチスはある程度、浸透していたことが指摘され、その支持基盤が特定の階層に偏ることなく、全社会層的性格を持っていたことが指摘されるようになっていく⁽¹⁾。

その際、この議論をホワイトカラー層を例にしてみると、当初ホワイトカラー層もナチスの積極的な支持層として捉えられていた⁽²⁾。これに関して、J.コッカは、中間層テーゼを発展させる形で、ホワイトカラー層のナチスへの傾斜をより精微に理論付けた⁽³⁾。その説明によると、ホワイトカラー層はワイマル期、労働条件・給与など客観的条件において労働者層との平準化を経験した。また世界経済危機において、労働者に比べ、軽微であったとはいえ大量失業など経済的負荷を受けた。これらの事態は通常以上のものを、ホワイトカラー層に与えることとなった。というのもホワイトカラー層は、自己を明確に労働者と区別して位置付けていたがゆえに、これらの事態を、格下げとして認識し、相対的な下降感、フラストレーションとして強く体験していくようになっていったのである。そしてこのことが社会的抗議のエネルギーを形成し、ナチス

(1) D. Gessner, *Weimarer Republik*, Darmstadt 2002., G. Schulz, *Die Angestellten seit dem 19. Jahrhundert*, München 2000. 中間層テーゼについての最近の整理としては、邦語研究については、雨宮昭彦『帝政期ドイツの新中間層——資本主義と階層形成——』東京大学出版会、2000年；原田昌博『ナチズムと労働者』勁草書房、2004年。

(2) J. Falter, *Hitlers Wähler*, München 1991.

(3) J. Kocka, Ursachen des Nationalsozialismus, aus *Politik und Zeitgeschichte. Beilage zur Wochenzeitung das Parlament*, B25/80, 21. Juni 1980, S.10f. (千代田寛訳「ドイツにおけるファシズムの原因と帰結」広島史学研究会『史学研究』第148巻、1980年) J. Kocka, *Die Angestellten in der deutschen Geschichte 1850-1980. Vom Privatbeamten zum angestellten Arbeitnehmer*, Göttingen 1981, S.163. このコッカの説は、雨宮、前掲書、11頁で詳細に紹介されている。

への政治的支持の社会的基盤となったというのである。

だが上記のコッカによるホワイトカラー層のナチス支持の説明枠組みに対して、批判が出されていった。M. プリンツは、ホワイトカラー層は様々な社会政策的特権・労働法上の特別な位置付けを、ワイマール期において獲得し、ホワイトカラー層は労働者よりもこの面で利益を得ていたとする⁽⁴⁾。R. ハミルトンはホワイトカラー層は世界経済危機時においても、その所得は名目所得としては減少しながらも、実質所得という点では上昇していることを主張する⁽⁵⁾。世界経済危機時においても、ホワイトカラー層は確かに経済的負荷を受けたとしても、その大きさは労働者のほうがより厳しく、ホワイトカラー層の負荷は労働者と比べて相対的に過小であったことが強調されているのである⁽⁶⁾。これらの指摘は、ホワイトカラー層の優位性を強調することにより、コッカによるホワイトカラー層の労働者層との平準化像に修正を求めるものと言えよう。ホワイトカラー層も、ナチスとの関係についての再検討が迫られることになっていったのである。ホワイトカラー層を例にしてみれば、概してナチスの選挙上の成功の問題は、その要因、位置付けをめぐる大きな展開を見せていったと言えよう。

そしてその試みと同時に、また重なるものとして、なぜ人々がナチスを支持するようになったのかという事に関しても、多くの論点が提示さ

(4) M. Prinz, "Bilderbuchverhalten an Mäßigung" ? — Kritische Fragen zu den Angestellten in Weimar, in *Tel Aviver Jahrbuch für deutsche Geschichte*, 17, 1988, S.92ff.

(5) R. Hamailton, Die soziale Basis des Nationalismus. Eine kritische Betrachtung, in: Kocka(Hrsg.), *Angestellten im europäischen Vergleich. die Herausbildung angestellter Mittelschichten seit dem späten 19. Jahrhundert*, Göttingen 1981. S.370-372; Prinz, Ibid, S.89.

(6) M. Prinz, *Vom neuen Mittelstand zum Volksgenossen. Die Entwicklung des sozialen Status der Angestellten von der Weimarer Republik bis zum Ende der NS-Zeit*, München 1986, S.18; Prinz, "Bilderbuchverhalten an Mäßigung"?, S.89.

(7) J. Kocka, Ursachen des Nationalsozialismus, aus *Politik und Zeitgeschichte.Beilage zur Wochenzeitung das Parlament*, B25/80, 21.Juni 1980, S.10f.

れてきた⁽⁷⁾。その代表的なものだけでも、世界経済危機の作用（ブリューニングのデフレ政策による賃金・俸給の低落、労使間仲裁の困難化、そして1930年世界経済危機以降の経済的苦境と前代未聞の規模での失業の増加、第一次大戦における敗北とその諸結果（第一次大戦期の戦時高揚と、敗北後の幻滅過程で生じた著しく攻撃的・煽動的なナショナリズム）、領土の喪失、ドイツ戦争責任論に基づく高額な賠償義務と主権制限、ナチスの宣伝戦術、そして中間層のイデオロギー的態度とナチスとの関係（中間層の持つ反プロレタリアートの態度、権力者・富裕者への敵対的態度、それがナチスの反社会主義的と反資本主義的政治アジェンダに一致⁽⁸⁾）、など今日まできわめて多くの要因が指摘されてきた。

1 心理的・精神的な負荷について

これら一つ一つが、ナチス支持の問題に関し、非常に大きな重要性を持っていると考えられる。（もちろん、この問題に関してはなお多くの論点が提示されており、ここでふれられているのはその代表的なものにすぎない。）だがこのような中、本稿では、ある一つの要因に注目し、それを掘り下げていきたい。それは心理的・精神的な負荷の問題である。というのはなぜ人々は、ナチスを支持するようになったのか、その原因・構造を、考え深めていく上で、それが持つ重要性にあらためて気付かさせられるからである。

実際、先のコッカのホワイトカラー層のナチス支持の説明枠組みにおいても、この重要性ははっきりと見てとることができる。コッカは、ホワイトカラー層のナチス支持の説明枠組みにおいて、「ホワイトカラー層は、自己を労働者層と異なるものと規定していたがゆえに、労働者との

⁽⁸⁾ この問題は、ドイツ特有の要因に結びつくことになる。そのような自己を労働者と規定せず、中間層という強い意識・規範はドイツにおける身分的・官僚的性質を持った前工業的、前資本主義的な長期的諸伝統の作用として、ドイツの特殊性の問題に結び付くとされる。J. Kocka, Ursachen des Nationalsozialismus, S.10f.

平準化を、通常以上のものとして受け止めることになっていった。そしてそれを相対的な下降感、フラストレーションとして強く体験し、それが社会的抗議のエネルギーを形成し、ナチスへの政治的支持の社会的基盤に結びついていった⁽⁹⁾」としている。心理的・精神的負荷はその説明枠組みにおいて重要な構成要素となっているのである。

またその重要性は、同時代の研究者T.ガイガーにおいても強調されている⁽¹⁰⁾。彼の研究〔T.Geiger, Panik im Mittelstand, in: *Die Arbeit*, 1930, S.637-655.〕は、ナチス分析の位置付け上、きわめて大きな意味を持つものとされている。それはナチス支持層における中間層の重要性を提起する役割をし、その後のナチス支持層における中間層の役割を指摘する中間層テーゼを導いてくこととなった。また近年では、雨宮氏がこのT.ガイガーの研究を再検討し⁽¹¹⁾、この研究が持つ中産階層間の政治方向性の詳細な分析という点、また経済・社会政策による理性的対応の提起という面に関し、その重要性を指摘している。

ガイガーは、ナチス支持層における中間層の役割を強調した上で、以下のように述べている。実際、「ナチスの成功は、国民的綱領に基づくよりもむしろ、それが全く積極的な綱領を持っていないことにあると。…極度に危機的興奮に満ちたこの時期、人々は、反逆的非理性的政策に飛び込んでしまっている。」「これは目を覚ましている国民の選挙ではない。頭を失った大衆の選挙になってしまっている。意気消沈しているもの、不安に駆られているものは、彼らの無気力を払いのけ、あらゆるものに抗して叫びをあげている。」「ナチスは、人々に言うことはできない。なにをするのか、どのようにしたら救われるのか。彼らは、ただ告知することだけを知っているだけである。すべては変わらなければならない。

(9) Kocka, *Die Angestellten in der deutschen Geschichte*, S.163ff., 雨宮, 前掲書, 11頁。

下線部は著者が挿入

(10) T.Geiger, Panik im Mittelstand, in: *Die Arbeit*, 1930, S.637-655.

(11) 雨宮, 前掲書。

絶望した人は、容易に信じてしまう。問うことなしに。」と。そして、
「中間層を、ナチスに熱狂させたのは、心配・不安、生活不安 (Sorgen und Lebensangst) である。」(下線部は著者が挿入) とまでしているの
ある。

なぜ人々はナチスを支持するようになったのかについて、その心理
的・精神的な問題自体が、ここでは強く問題視されている。そしてこの
事は日本において山口定氏によっても、指摘されている⁽¹²⁾。山口氏は、
初期の段階で見られる人々のナチスへの理想主義的献身、そしてその後
の彼らの能動的、行動的ニヒリズムを説明するにあたっては、四年も続
いた戦争、そこで得られた空しさ、人生の夢と計画の破綻、既存の価値
体系、秩序への疑問と失望、家族の繋がりの縮小、これらの精神的急迫
状況の重要性を指摘し、「ファシズムにおいては、そもそも心情と行動に
よって先行的に規定される面があるのではないか。『ファシズムの思想』
はあっても『思想としてのファシズムはない』と言えるのでは。」と、心
理的・精神的な意味合い自体を強調しているのである⁽¹³⁾。

心理的・精神的な要因は、いくら強調してもしすぎることはない。そ
こでは心理的・精神的な要因は、そのナチス支持の説明枠組みの中で、
重要な構成要素となっているのである。本研究では、あらためてこの心
理的・精神的な要因自身に注目し、そこからこの問題を捉えていくこと
を目指したい。

2. Abel-Documentsについて

この問題に取り組むために、史料としてAbel-Documentsを用いる。
Abel-Documentsとは、1934年、当時アメリカの社会学者 Theodore Abel
が、ナチス党員に、なぜあなたはナチスを支持するようになったのかを、
書かせた応募文集であり、総計数百人のナチ党員のナチス支持の過程・

(12) 山口定『ファシズム』有斐閣 1979年、89、100頁。

(13) 山口定『ファシズム』有斐閣 1979年、89、100頁。

理由が当事者によって詳細に書かれている。以下このAbel-Documentsの内容について述べていく。

Abel-Documentsは、1934年6月に、Theodore Abel (コロンビア大学の社会学教授)が、ナチ政権誕生の翌年、集めた581人の生え抜きナチ党员による自伝的記述であり、ヒトラー政権掌握以前に、すでにナチ党员、もしくはその支持者であったものに、応募資格が限られていた懸賞論文コンテストの結果として、集められた⁽¹⁴⁾。応募者は、「彼らの個人的生活（特に第一次大戦後の）…彼らの家庭生活，教育，経済的条件，団体加入，ヒトラー運動への参加，重要な経験，思想，戦後期の事件や思想についての感想」をできるだけ詳細に作文化することが求められ，それを集めるための宣伝文は，ナチ党すべての地方事務所，党の新聞，宣伝省のパンフレットに掲示されたとされる。その結果，581通の記憶が収集され，その研究成果は，T.Abel, *The Nazi Movement . Why Hitler came to power*, New York 1938. として出版された⁽¹⁵⁾。さらにその後，アメリカ，カリフォルニア大学のP.H.Merkelが，それを再度，5年がかりで精査を行い，P.h.Merkel, *Political Violence under the Swastika——581 Early Nazis*, Princeton Univ. Press 1975. として公表した⁽¹⁶⁾。

この史料について，P.H.Merkelは，これは非常にわずかなナチス支持者の内面的洞察に関する史料の一つであり，今日，これ以上の史料は，取

(14) Abel-Documents, in the Hoover Library on War and Revolution at Stanford, California.

もっとも，P.H.Merkelによれば本来Abelによって集められたオリジナルの史料は，それより多かったとされる。だがその史料は1951年に，約100事例分，失われることとなった。（1951年，FBIが，理由不明のまま，押収し，「おそらく非ナチ裁判〈for pending denazification trials〉のためと推測される。」そのまま返還されることもなかったという。）P.H.Merkel, op.cit., p.6

(15) T.Abel, *The Nazi Movement . Why Hitler came to power*, New York 1938. (小池四郎訳)『ヒトラーとその運動——血盟六百の部下は斯く語る——』実業之日本社 1940年。

(16) P.h.Merkel, *Political Violence under the Swastika——581 Early Nazis*, Princeton Univ. Press 1975.

り出すことはできないとしている。また日本においては山口氏は、この1934年6月という時期は、ナチス・ドイツと西洋諸国の関係はまだそれほど悪化しておらず、検閲の必要あまりなく、政権掌握後の興奮のまだ冷めない時点での、ナチ党活動家たちの履歴と正直な信条告白と考えることができるとする⁽¹⁷⁾。この文書は、まさに人々のナチス支持の原因をさぐる上での第一級の史料とされる。(もちろんこの史料の価値について、慎重な判断を要する点もある。ナチ党員全体の統計的データに比して、さまざまな偏りが見られる点、文章力に自信のある党員だけが、応募しているとか、党機関の熱意によって、地域的偏りがみられるといった問題、そして応募者構成は、1930年以前の入党者が約56.3%を占めており、1930年以前のナチ党入党者の割合が、実際は、15.3であることを考えると、1930年以前のナチ党が主要な勢力になる以前、いまだ周辺的存在であった時期に、ナチスを支持するようになったものたちについて、多く語られている史料であるといえる事である。だがそのような留意点があったとしても、この史料は、ナチ支持者の内面、彼らが支持に至る過程を探求する上で、高い価値を有しているとされる⁽¹⁸⁾。)

3. ナチス支持の構造——政治的急進化——

そしてこのような中、P.H.Merkelによって、この史料を用い、なぜ人々はナチスを支持するようになったのか、その政治的急進化を考えるにあたり、注目すべき分析が行われた。以下、その研究の一部をみていくこととする。

彼は、政治的急進化の動因を分析し、ナチ活動家の急進的活動へのエスカレーションの段階を、次のような4段階に分けた。

第一段階：前政治的段階 (prepolitical status)〔少年時代や、一定の公務

(17) 山口定『ナチ・エリート』中公新書 1976年、54、55頁。

(18) P.h.Merkel, *Political Violence under the Swastika——581 Early Nazis*, Princeton Univ. Press 1975, S.6ff.

員、軍人などの精神にみられるような政治に無関心な心理的状態]

第二段階：軍事化 (militarization) [反革命・退役軍人組織などへの準軍事的団体への関与]

第三段階：政治化 (politicization) [ワイマール期の政党、選挙への政治的参加段階]

第四段階：ナチス支持 [ナチ党员や、ナチ突撃隊など、その活動にみられるような完全な過激主義段階]

そして各々の段階への移行の原因を、詳細に分析した。この分析においては、第一、第二、第三、第四段階へといたる政治的急進化の動因を探っている。この分析から言える事は、第一、第二、第三、第四段階に進むにしたがって、その政治的急進化が、エスカレートし、完全なナチス支持にいたるということである。そしてその中でも第一段階から、第二段階への移行について、その原因を分類したものが表1である。(ナチスへの政治的急進化過程を示している。)

表1 第一段階（前政治的段階）から 第二段階（軍事化）への移行		
	数	パーセント
戦場での前線経験	11	4.1
本国での戦争の衝撃	11	4.1
敗北・ヴェルサイユのショック	15	5.5
領土喪失、国境争いのショック	27	10.0
外国の占領のショック	38	14.0
革命・旧秩序瓦解のショック	58	21.4
革命論者への反対	56	20.6
新しいワイマール指導者へのショック	33	12.2
反ユダヤ主義傾向 (Judenkoller)	22	8.1
	271	100

出典：P.h.Merkel, op.cit.p.322.

そうすると、以下の事が分かる。政治的急進化の第一段階から第二段階、ナチス支持者に至る以前、前政治的段階から、なぜ準軍事組織に関与するようになったのかという事に関し、(以下、Abel-Documentsにおける支持者の直の文章を加えていく。)

革命・旧秩序瓦解のショック、革命論者への反対

「1918年11月9日、その時間を私は決して忘れることはなかったし、それはこれらかもそうであろう。私は、述べることができない。それがどれほど、極度に忌み嫌うものとして私を襲ったかを。祖国愛のないけがれたやからが、故郷に駐留していた軍団から、腕章（Achselstücke）を引きちぎり、これまでの戦いで獲得された鉄十時勲章を、胸から引きちぎり、何百万ものドイツ人がその下で戦い、命をささげてきた、私たちの黒・白・赤の国旗を下水溝にひきずっているのである。私が心の深いところに感じた。このようなドイツ前線兵士の、ドイツ国民すべてにとって神聖なシンボルをはずかしめるようなものたちとは、生涯、なんら共通したものをもつことはないであろうと。⁽¹⁹⁾」(下線は著者が挿入)

これらの声に見られるように、戦争の衝撃、領土の喪失、占領・革命のショック・衝撃（反対を含めて）などの要因の重要性が指摘されているのである。つまり完全なナチス支持者になる過程、準軍事団体への関与段階において、そこには革命・旧秩序瓦解のショック、革命論者への反対、領土喪失、国境争いのショック、外国の占領のショックをはじめとするなんらかのショック・衝撃の動因を介してそこに至っているのである。

この事はさらなる分析においても、より顕著に見ることができる。表2は、先の第二、第三、第四段階への政治的急進化過程への移行の原因をそれぞれをまとめたものである。

⁽¹⁹⁾ Abel-Documents, Nr.972

表2 第二, 第三, 第四段階へ政治的急進化の刺激要因 (%)			
	二段階	三段階	四段階
戦争の衝撃, 領土の喪失, フランスによる占領	<u>37.6</u>	<u>21.1</u>	3.1
革命のショック, 革命家への反対	<u>42.1</u>	<u>31.7</u>	6.4
経済的困窮, 他の理由,		7.5	5.4
ワイマール指導者, 政治抑圧への反対	12.2	16.4	8.7
イデオロギー的熱狂, ヒトラー運動への強い印象	8.1	23.3	<u>76.4</u>
	100	100	100

出典：P.h.Merkl, op.cit., p.382.

(下線は著者が挿入)

すると表において示されるように、政治的急進化の第三段階、いわゆる政治活動への参加段階においても、第二段階と同じく、戦争の衝撃・領土の喪失、フランスによる占領、革命のショック、革命家への反対などの原因が深く関与している事を見て取ることができる。そしてもう一つ、注目に値することがある。急進化過程の最後の過程（第四段階；明確なナチス支持の段階）において、イデオロギー的熱狂、ヒトラー運動への強い印象が決定的な重要性を持つにいたっている事である。

上記の表から読み取れることは、人々がナチスを支持していく過程において、戦争の衝撃、領土の喪失・占領・革命のショック、衝撃などの要因を介して、その上に、イデオロギー的熱狂、ヒトラー運動への強い印象などの政治的方向性が加わり、ナチス支持にいたっている事である。この事が示すことは重要である。なぜ人々がナチスを支持するようになったのかという事に関して、彼らはただちにナチ党支持者になったのではない。そこには、なんらかの要因が存在しているのである。そしてショック・精神的な衝撃を与える体験が彼らのナチス支持の過程において、きわめて重要な役割を演じているのである。

ではそもそも、このような心理的な衝撃とは、いかなるものなのだろうか。その事を分析していく上でも、政治的イデオロギーと心理的負荷という2つの要因に注目し考察していきたい。

4. 政治的イデオロギーと心理的負荷

先の表2で見られたように、ナチス支持を考えていく上で、イデオロギー的熱狂・ヒトラー運動への強い印象など、政治的イデオロギーは大きな意味を持つものであった。またそもそもAbel-Documentsを収集したT.Abelは、『ヒトラーはなぜ権力を握りえたのか?』1938年の研究において⁽²⁰⁾、ヒトラー運動を進展せしめたものとして以下の4つの要因を指摘した。

1. 国民不満感情の役割 (現在の社会組織に関する不満の蔓延)
2. ナチス・イデオロギーの影響力
3. 戦術と戦略の役割
4. 超人的指導力の役割

ここにおいても政治的イデオロギーは、大きな重要性を占めている。ナチスへの支持を考える上で、ナチスへの政治的イデオロギーの影響力は大きな意味を持っているのである。では実際、この政治的イデオロギーと心理的負荷との関係は、いかなるものなのだろうか。その事をみていくためにもAbel-Documentsを例にしてみたい。以下は、Abel-Documentsにおけるナチス支持者の履歴の一部である。

Nr.947 Karl Schlee 1902年5月16日生まれ 出身Rheinpfalz ⁽²¹⁾

「ライン・プファルツの美しい場所、大きな交通道路から離れた、小高い丘の上に商人の村、カールスブルクがある。(そこでは、その地に根ざす食物向けの地域が存在せず、それゆえ、人々は、生活に必要なものを、手工業製品による取引によって稼ぐことを余儀なくされた。)そこでわたしは、1902年5月16日、商人夫婦Ludwig とEmilie Schleeの息子として生まれた。」

「両親の職業は、非常に厳しいものであった。私は早い時期に、自分

⁽²⁰⁾ T.Abel, *The Nazi Movement . Why Hitler came to power*, New York 1938, p166.

のパンを稼ぐというのが、まさに、どれほど困難なものであるのかを学んだ。しかしまた同じように、誠実で実直な人々から、彼らの稼ぎを、ほとんど抜き取ってしまうことに習熟してしまっている輩をもまた知ってしまった。このことについては、後に述べることにする。」

「私には、まだ当時、馴染のなかった若い男（彼はイギリスの戦争捕虜収容所から帰還してきた。）が、私の見解を、いっそう強めてくれ、二人で当時の民族自由運動への道を、1922年に見つけることとなった。同僚らと共に、最初の会議を訪れたことは、私にとって、多くの危険と結びついていた。なにしろ私たちの住居は、フランスのライン軍によって占領された地域の中にあったからである。私たちは、当時いまだ占領されていなかったマンハイムの会合に行かなければいけなかった。

最初の会議、そこでは、ある一少佐Buch（今日のライヒ裁判所議長[Reichsparteigerichtes]）が、アドルフ・ヒトラーの運動の目的について話しており、その印象は、私には大きく、すばらしいものであった。そして私はすぐさま決心した。その一員に連なることに。私たちドイツ人の祖国を、完全な衰亡から守り、国民を蝕むマルクス主義と共産主義を根絶することを助ける事を目的としている運動に。」

「私はこの記録の最初において、すでにユダヤ人について言及した。いまや私自身、その犯罪行為を、自らの両親において、経験しなければいけなくなった。私の両親は、不実の策略によって全財産がだましとられ、それによって、戦争時の病気に苦しんでいなければならなかった父は、人生の最後の月日、極度の困難さを負うことになった。

これらすべての事情によって、戦いへの私の意志は強まった。私のすべての行為が、ナチ運動であるとみなされるほどに。まるで家族、職業

(21) Abel-Documents, Nr.947.

がなく、ただ指導者ヒットラーとその運動、祖国の繁栄ために、働いて
いるかのように。・・・。」（下線は著者が挿入）

ここから読み取れることは、ナチス支持を考える上で、下線部にみられるように、政治的イデオロギーと同時に、心理的負荷がそれを強めていく働きをしている事である。またこの事は、他の例においても見て取ることができる。

Nr.764 名前Emst Glogau 1907年8月18日生まれ 出身Berlin ⁽²²⁾

「私は1907年4月18日、司法警官Gustav Glogauの長男としてベルリンに生まれた。プロテスタントの洗礼を受け育った。私はベルリンの国民学校で教育を受けた。革命勃発の際、私はやっと11歳半であり、まさにこれから成長していく年であった。」

「目の前にありありと思い出される。革命の日々、無実の人々が、赤い兄弟との戦闘の中、打ち倒されたのを。買い物中の母親でさえ、流れ弾によって、通りで血まみれになるということを目撃した。またただ任務を果たしているだけの兵士が、むごく殺害される様もみた。自分自身も、突然発せられる機関銃の弾をよけるため、身をふせる体験をした。私は感じた。これらのことを少年にもかかわらず経験し、永遠に記憶の中に留まることになるだろうと。厳しく喜びのない記憶として。」

「経済的困窮はきわめて大きなものとなり、家族みなを、そして家庭生活をひどく神経質にさせた。このようなことから、気分転換を欲することとなった。絶えず争いをする人らの混乱の中に、陥りたくなかった。私は親の反対を押し切って、ビスマルク少年団へ入った。」

⁽²²⁾ Abel-Documents, Nr.764

「インフレの激化によって、生活状況は悪化していった。生活の糧を
もはや見つけることのできない人々、社会は、悲惨な状況に陥った。貧
窮した国民が、良心のないごろつきや詐欺師に略奪されているというの
に、それを統御するはずの政府は、なにもなさずますます多くの人々が、
貧窮に陥れられることになる。私は確信するに至る。いつか私たちの世
代が、この国家の担い手に成らなければならない。この国家は、いまま
でなんら活動することなく、責任を放棄したものたちによって支配され
ており、最後の財産まで劣化させることとなる。」

「そしてヒトラー運動の目的を知ることなく、だが瞬間感動した。た
だ彼らがドイツへの立場をとり、そのために献身し、戦う勇気を奮い起
こしてくれるだけで、自分にとっては十分であった。」（下線は著者が挿
入）

ここにおいて見られることは、ナチス支持の問題を考えていく上で、
政治的イデオロギーと同時に心理的負荷が密接な関係にあることである。
（心理的負荷が、ナチスへの支持をより強めていく方向に働いていると言
える。）この事は、下記の心理的負荷と政治的イデオロギーを調べた表3
からも、みてとることができる。以下はホワイトカラー層を主に、その
ナチス支持における、政治的イデオロギーと心理的負荷の有無を調査し
たものである。

表3 心理的負荷と政治的イデオロギー		
名 前	心理的負荷	政治的イデオロギー
Ewald Pauteleit	1918年、私たちが誇りと思っていた神聖なすべてがもはや存在しないものとされた。	ナチスの大集会を訪れ、ナチスを現存する不正を取り除く運動と見る。
Maria Engelhardt	駐留する軍団から、腕章が引きちぎられる。彼らとは、生涯なんら共通するものを持つことはないだろう。	ヒトラーのわが闘争をみて、それを真のドイツがめざし切望しているものとみる。
Nr.921	共和国において経験したものは、未来への喜びを与えてくれるものではなかった。	指導者の演説が心に響く。
Fritz Seyffardt		ドイツにおける自由主義システムは、結局うまくいかないだろうとみる説が心に響く。
Willy Fischer	インフレの衝撃から、意識が再度政治へ	反ユダヤ主義を持ち、民族保護同盟に繋がりを持つように
Ludwig Gabelmann	ルール占領によって占領側から受けた侮辱・辱めは叙述することができない	ユダヤ経済が、最後の貯蓄を奪っていくという認識
Nr.744	病院において自分の腕章を力づくではぎとられかける。自らの国家的な証を相手から守るため、自分ではぎとる。	ヒトラーによってドイツは、ぬかるみからときはなたれる。
Bruno Thürling	父が鉄道員を助けようとし、命を落とす。対して犯人への判決は懲役4年。この判決は、自分にとって全く理解できない。	
Fritz Fischer	少年期、母の保護なしにやりくりする経験。メーデに参加したが、全く一体感を感じず。	
Mossel	共同出身者の不忠に、ひどく失望。彼を解雇することに。	

註：Nr.921、Nr.744は、氏名が識別できなかったため、史料番号を記した。

出典：Abel-Documentsから著者が作成。

すると多くの場合において、心理的負荷と政治的イデオロギー双方を経験している事をみてとれる。ナチスを支持していく過程において、両

者の相関関係がみられる。ナチスを支持していく中で多くの場合で政治的イデオロギーを身につけていると同時に、それと同じくなんらかの心理的負荷をその過程の上に経験している事をみてとれるのである。

むすびにかえて

これまで心理的衝撃と政治的方向性という見方に注目して、ナチス支持に至る過程を見てきた。そこではナチスの政治的イデオロギーが、大きな重要性を持っている事を見て取ることができる。ナチスを支持する上で、ナチスの政治的イデオロギーは大きな役割を果たしているのである。だがその一方で、心理的要因自身に視点を移した場合、また別の側面をみてとることができるのではないかと思う。つまり各々の基本的政治方向性に基づきながらも、個々人が、人生過程において受けた心理的負荷が、ナチス支持の要因として、大きな重要性を持っているのである。生活上で受ける心理的負荷がまた、ナチスへ押し流していつてしまう面を見てとれるのではないかと思う。

またこの事は、別の意味も持っている。本稿では、政治的イデオロギーと同時に、心理的負荷に注目した。この生活の中で受ける心理的負荷に視点を移した場合、それは、単に国家主義的、反共産主義的、ナチスに親和的なイデオロギーを持っているから、ナチスを支持するようになるというだけではなく、その過程における心理的負荷がまた意味を持つ事に注目することになるのではないかと思う。

そうする事によってナチス支持の問題を、人々に対する心理的負荷・問題の蓄積として、現代にも通じる危険のものとして、見ていく事に繋がっていく面があるのではないかと思うのである。

本稿における試みは、なお多くの精査していくべき点が存在する。だがそのような中においても、この試みを通して、ほんのわずかでも、新しい論点・視点を、提示することに繋がれば、そのきっかけの一つになればと思う。